

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 18 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520907

研究課題名(和文)現代中国社会的変容とその研究視座の変遷 宗族を通じた検証

研究課題名(英文) Social change in contemporary China and the shift of research paradigm :from a view point of lineage

研究代表者

瀬川 昌久 (SEGAWA, Masahisa)

東北大学・東北アジア研究センター・教授

研究者番号：00187832

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：宗族という古典的研究テーマの有効性について再考すべく、本研究課題では20世紀初頭以来宗族が直面した社会変化と、その間の研究者たちの視座の変遷という、2つのレベルの変化に焦点を当てた。そして、宗族の現状に関する客観的検討を通じ、今日の文化人類学者の多くが親族関係を極めて私的で局所的な社会現象とみなす傾向があるのに反し、依然として現代中国社会の中でそれは重要な役割を果たしていると結論づけた。宗族こそは、親族関係が社会の公的な領域においてなおも効力と価値をもち得ることについての再考へとわれわれを導く重要な鍵なのである。なお、本研究課題の最終成果としての論文集が、2015年度中に刊行される予定である。

研究成果の概要(英文)：In order to re-examine the validity of the very classical research topic "Chinese lineage", our research has focused on change at two levels; that involving Chinese lineage since the beginning of the 20th century and that of the perspectives of the scholars engaged in the research of Chinese lineage for this period. Through an objective assessment of the present status of Chinese lineage, we concluded that it still kept an important roll in contemporary Chinese society, in spite of the tendency in cultural anthropologists of today to suppose the kinship tie as something very private and socially restricted phenomenon. We confirmed that the Chinese lineage is one of the important clues which led us to the reconsideration of the potentials and the value of kinship in public domain of human social life. An anthology as the final result of this research project will be published in 2015.

研究分野：文化人類学

キーワード：宗族 親族研究 中国 研究史 文化資源化 社会的正統性 社会変化 価値体系

1. 研究開始当初の背景

中国の父系の親族組織である宗族(そうぞく)は、20世紀初め以来一貫して社会人類学的研究の重要テーマであったが、今日に至るまでに2つの大きな「変化」を経験している。第一の変化は、社会環境や文化的背景に大きな変化が生じたことにより、研究対象としての宗族そのものが大きく変質していることであり、第二の変化は研究者の側のパラダイム・シフトにより、研究動機や宗族の存在様態についての基本理解に大きな変化が生じていることである。こうした二重の変化を踏まえた上で、宗族というもののもつ研究対象としての価値を評価し直す必要があった。

2. 研究の目的

本研究は、宗族に関するこれら2つの変化、すなわち近現代中国社会の中での宗族組織やそれに付随する理念自体の変化と、それを研究しようとする研究者自身の視座の変化を、両方同時に対象化することにより、文化的持続性と社会変化という普遍的な問題について考察し、ひいては今後の文化人類学的な中国社会研究のあるべき方向性を展望することを目的とした。

3. 研究の方法

1990年代に宗族再生現象が顕著となる以前から宗族を研究対象としてきた上位世代の研究者と、主にそれ以降に研究を始めた若手研究者を糾合した研究会を立ち上げ、宗族研究史について総括するとともに、それを参加者の間で共有することを試みた。さらに、最新の調査に基づく事例研究を踏まえ、20世紀半ばまでの宗族研究では捉えきれなかった宗族のもつ新たな側面や、現代的な社会変化の中で宗族が持続的に果たしている文化的・社会的機能についての解明を試みた。

4. 研究成果

本研究では、文化人類学的な宗族研究に携わっている熟年世代ならびに若手世代の研究者を研究協力者として糾合し、定期的な研究会ならびに日本文化人類学会第48回研究会の分科会を組織して、研究史の整理、調査資料の持ち寄り、および討論を重ねてきた。そしてそれに基づいて、最終的な研究成果として、『宗族と中国社会の現在 古典的テーマからの新たな展望』と題する学術論文集を完成させ、2015年度前半期には(株)風響社より出版の予定となっている。同論文集の内容は以下のとおりである。

第1章「宗族研究史展望 20世紀初頭の『家族主義』から21世紀初頭の『宗族再生』まで」(瀬川昌久)は、まず20世紀前半から後半に至る宗族の研究史を概観するとともに、20世紀の中国社会のたどった大きな社会変化にともなう宗族自体の変成を跡付ける。また、自身の1980年代香港新界での宗族調査と、1990年代以降の宗族再生現象について

の調査の総括から、今現在宗族という対象を研究することの意義をあらためて考察している。そして、それは単に中国社会の文化的な持続性の証例としてではなく、歴史的な正統性を主張し他者との差異化を図るためのツールとして、現代社会の中で重要な価値を帯びるに至っていると論じている。

第2章「『中国人研究者』の中国社会文化研究における宗族」(轟莉莉)は、1980年代に著者の行った中国本土での調査研究において宗族が関心の対象として選ばれるに至った背景を自己分析的にたどりつつ、社会主義的な改革の中で宗族に加えられた圧力こそが、当時の社会変化を映し出す重要な鏡であったことを論じている。また、その後著者が展開した農民社会への儒教倫理の浸透についての研究や、日中戦争期の細菌戦被害地の研究などの個別的な研究テーマの中でも、宗族は依然として重要な要素として関わりをもっていることを具体的に示している。

第3章「宗族制度と宗族組織 湖北省の事例」(秦兆雄)は、M・フリードマンをはじめとする宗族研究史を批判的に検討した上で、団体化・組織化された父系出自集団としての「宗族組織」と、その形成の背景となる親族理念や制度としての「宗族制度」を区別する必要性を提起する。そして、著者自身の調査地である湖北省の事例をもとに、1970年代までの社会主義的な改革が、宗族組織を根底から破壊したにもかかわらず、宗族制度そのものは大きな変化を被らなかつたこと、また、現在は宗族組織の再生に積極的に関わる動きはみられないが、人々の関係としての宗族は依然として社会的な重要性を保っており、宗族制度が一種の文化資源として再利用されつつあると論じている。

第4章「社会的住所(Social Address)としての宗族 福建省客家社会における人物呼称の事例から」(小林宏至)は、福建省南部の円形土楼で知られる宗族村落での調査データをもとに、日常生活の何げない会話の中で人々が交わす呼び名などに、宗族を形作る原基とも言うべき父系出自の関係が散りばめられていることを示し、いわば儀礼や族譜などのフォーマルな次元での宗族の認知とは異なる、人々の日常次元での宗族の認知を、ありのままに取り出そうとした意欲的な試みである。

第5章「現代中国における親族集団の組織化に関する一考察 水上居民の祖先祭祀からの分析」(長沼さやか)は、広東省中部の珠江デルタの沙田地域に暮らす水上居民出身の人々を取り上げ、かつては宗族組織や集団的な祖先祭祀儀礼の習慣をもたなかつた人々の間で、2000年代以降親族集団の組織化と集団的な祖先祭祀儀礼の実施がみられるようになったことを示している。そして、宗族の政治経済的な機能が失われている今日において、このように新たな宗族形成へ向か

うとも読みとれる動向が生じている理由として、周囲の陸上漢族の人々の視線の中で正統な儀礼を行うことにより、正統な漢族の一員として認められたいと望む動機が存在を指摘している。

第6章「現代中国の『漁民』と宗族 広東省東部汕尾の事例から」(稲澤努)は、広東省東部・汕尾市の陸上がりした「漁民」たちを研究の対象とし、もともと宗族組織を有さなかった彼らの間でも、一部に宗族の新生の動きがあることを提示している。ただし、第5章の長沼の分析とは異なり、この地域の「漁民」の間ではそのような動きの背景にある動機は、陸上の正統な漢族に同化することにあるというよりも、より新来で文化的・経済的に他者性の高い四川省などからの出稼ぎ者たちとの社会的差異を明示することにあるとの解釈を示す。

第7章「現代中国の移民と宗族に関する一考察 福建省福州市の事例から」(兼城系絵)は、福建省福州市近郊の1華僑母村における宗族の復興の事例を提示している。福建省の中にあっても、同村はもともと宗族の発達が顕著な村ではなかったが、1990年代以降、いくつかの姓の住民の間で海外移住者からの資金環流などをもとに祠堂の再建の動きがあったという。ただし、共有地産などの財源を欠く現状では、宗族活動の維持は必ずしも容易ではなく、納骨堂の経営と組み合わせるなど、各々のコンテクストに応じた模索が行われているとしている。

第8章「宗族の形成、変遷そして現在 広東省珠江デルタの一宗族の事例から」(川口幸大)は、広東省中部番禺の調査地の事例をもとに、明代以降の宗族形成の歴史を具体的にたどった上で、中国の南の辺縁に位置する同地域では、社会的文化的正統性を獲得するために、宗族組織の形成こそが他では代替不可能な社会結合の形であったと論じる。また、現代中国においては、農業の集団化等の政策の下でいったん宗族組織が解体した後、1990年代までの宗族組織の復元期と、2000年代に入ってからのものであることを区別することの重要性を指摘し、後者を後押ししている要因として政府による「伝統文化」の喧伝があるとしている。そして、宗族が前近代に有していた政治経済的な機能を喪失しつつも現在復興している背景として父系出自理念の根強い持続性を掲げ、親族研究がドメスティックな領域に局限されがちな現在の文化人類学において、宗族の研究はそれを国家社会レベルの現象へと展開するための手がかりとしての可能性を秘めていると論じている。

以上の個別的な研究成果を総合し、宗族研究の新たな意義について結論できることは以下のとおりである。宗族の研究が、かつての人類学のメイン・トピックであった親族研究の延長線上に位置づけられるべきものであることは確かであるが、そこには現在まで

の人類学的な親族や家族についての理解を、根底から問い直すことにつながる要素が含まれている。それは、上述した研究成果論文集の第一章で筆者が、また最終章で川口が指摘しているとおり、宗族のもつ国家や地域社会の公的領域と個人とをつなぐ重要な役割であり、ともすると今日、個人の私的領域や「親密圏」の中で完結する事象とされがちな親族関係が、それを超出する役割を發揮し得ることを示すものに他ならない。

中国の宗族の中に、そのような公的領域、全体社会への接続の役割の存在を看破したのは、故M・フリードマンの慧眼であったが、その後主に宗族のそうした側面についての研究は清代以前の歴史研究の中で展開されるのみで、現代社会の中でそのことを再考しようとする者は少なかった。確かに、現代社会においては生産や消費の経済活動ばかりでなく、人と人の絆についての理解やそれに付随する行動倫理さえもが、集団のレベルから個人のレベルへと個体化される傾向が著しく、宗族のもつ集団的、公共的側面などは純粋に過去の事象であるとみなされてきた。

しかしながら、一九九〇年代以降に生じた宗族の再生現象は、中国社会において宗族のもつこの種の社会的構成員が未だ失われていないことを示している。再生された宗族は、単なる老人たちのノスタルジーに発した私的儀礼空間ではない。いかに小規模なものであると、族譜を編み祠堂を再建して祭祀を執り行うことにより宗族の再生が試みられる際には、単なる個人事業や一家庭の中で完結する事業として行われるのではなく、系譜に連なる「関係者」との調整・交渉のプロセスが含まれ、そのように相対的に個人を超越した事業として行われることによって初めて、「～氏家門」「～氏宗族」を名乗る営為としての意義付けを得ることができる。

それはもちろん、国家や地方政府の直接関与する事業ではないという意味において「公的」なものではないが、それでもなお、人々の社会関係の中では「個人」や「家庭内」の事象を越えた相対的な「公共性」を帯びた営為である。そのような相対的な「公」の領域をより外縁部へと限りなく拡大してゆけば、それは地域社会やさらには国家社会に関わる事象へと連続してゆく。そこでは、地方政府や国家が所掌する近代的含意としての「公的」な事象と、個々人の関係性の外縁としての「公」の領域は不可分に重なり合うのである。個別の宗族を超えた宗親会レベルの同姓者の絆は、潜在的には地域社会さらには国家社会全体を覆い尽くす性格を有している。そしてまたそれは、当該姓氏の歴史的起源へと遡ることによって、中国の歴史、中華民族の歴史全体へと結びつく性格のものでもある。

一部の地方政府が、宗族再生事業にコミットし、それを地域発展の道具として利用しようとしているように見えるのも、それが単に人々の関心を惹きやすく観光の目玉になり

得るからばかりではない。宗族の理念の根幹にある父系祖先の系譜意識は、上述のようにその発端を中国の歴史の中へと遡源する性格のものであり、個人の私的な利害を超えて、相対的な「公」の領域を紡ぎ出してゆく装置でもある。それゆえ、そうした宗族理念の枠組みの上に主張された社会的・歴史的正当性は、時に地方政府といえども「私人の利害」として捨て置くことのできない閾値へと達し、地域社会にとっての公共性を帯びた主張となり得るのである。

近代社会の支配的パラダイムは、親族関係を私的で社会的に局所的な関係であるとし、公共的な社会領域からは排除されるべきものとみなしてきた。その結果人類学の内部でも、親族関係の研究は人々の「親密圏」へと退縮する歴史をたどってきたと言えよう。しかし、現代中国における宗族再生の事例からは、宗族のもつ歴史的正当性生成のための強力なツールとしての性格が、個々の親族集団内部に止まらず地域社会に広く共有され実践されていることが示されており、地方政府レベルでもそれを無視できなかつたり、むしろそれを積極的に活用しようとする場合さえあることが明らかとなった。ここにおいて、宗族が体現する親族関係とその理念は、中国社会においては単に個人の私的領域に封じ込められるようなものではなく、国家社会や地域社会の公共的領域と個人をつなぐ役割を果たす潜在力をもった存在であることが示唆されている。ともすると今日、親族関係は個人の私的領域や「親密圏」の中で完結する事象とみなされがちであるが、宗族には明らかにそれには収まりきれない、それを超える性格が認められる。

このように、宗族は社会統合やナショナリズムとも結びつく要素を帯びており、ゆえに国家統治や市場での利益追求の観点に立つ人々にとってもその資源的価値が認識されつつある。このことは、中華民族の歴史を喧伝する出版物や愛国教育基地としての歴史的文物の指定などにも表れており、またそれは「儒教思想」の称揚、家族倫理の復権などといった中国国内における最近の社会現象とも深く連動しているものと考えられる。

一見したところ、宗族は前近代的な社会的構築物であり、既に社会的機能の上でも、また学術的関心の対象としても、時代遅れの遺物のように見なされがちである。しかし、そのように断じるのは極めて大きな錯誤であり、宗族こそは現代中国社会、ひいては現代の人類社会をより深く理解するための重要な手がかりなのである。

それぞれの社会がたどる近代化のプロセスは、それぞれ固有の軌跡を示しており、決して単一のプロセスに帰することはできない。東アジアの親族・家族理念や諸社会規範は現代社会の諸変化の中で変容しつつあるが、逆にそれらを客体化し、文化資源化することにより、公共の領域へと引き戻そうとす

る動きも存在しはじめている。すなわち、そこに見出されるのは単純に親族・家族の絆がプライベートでドメスティックな領域へと断片化され退縮させられて行くだけの一方的な過程ではない。その分析は、欧米社会のみを唯一のモデルとしては語るることのできない人類の「近代」の方向性を解明し予見する上で、極めて重要な手がかりであると考えられる。

少なくともその文化人類学的な意義に限定して考えても、親族関係の研究を「親密圏」の呪縛から解き放ち、潜在的機能の多様性や、そこに仮託される文化的意味の多様性についてより深い認識に到達するためには、中国の宗族という題材が貢献し得る点は非常に大きいと言わなければならない。それは決して、古色蒼然たる古典的な事象ではなく、文化人類学にとって新鮮な研究対象なのだということが確認できる。以上が本研究の主要な成果である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

- (1) 川口幸大 2015「空間/場所論から見た中国の祠堂 広東省珠江デルタを事例に」空間史学会編『空間史学叢書 2 装飾の地層』(岩田書院): 127-145頁。査読なし。
- (2) 瀬川昌久 2014「現代中国における宗族の再生と文化資源化」『東北アジア研究』18: 81-97頁。査読あり。
- (3) 瀬川昌久 2014「客家エスニシティの動態と文化資源化」武内房司他編『中国の民族文化資源』(風響社): 119-158頁。査読なし。

〔学会発表〕(計 2件)

- (1) 瀬川昌久 2014年5月18日、分科会「宗族研究展望 古典的研究対象の現在を再考する」趣旨説明、日本文化人類学会第48回研究大会、幕張メッセ(千葉市)。
- (2) 川口幸大 2014年5月18日、国家と宗族親族研究の新たな可能性に向けて、日本文化人類学会第48回研究大会(上記分科会・事例発表)、幕張メッセ(千葉市)。

〔図書〕(計 3件)

- (1) 瀬川昌久・川口幸大編 2015『宗族と中国社会の現在』風響社(印刷中)
- (2) 川口幸大・瀬川昌久編 2013『現代中国の宗教』昭和堂、全281頁。
- (3) 川口幸大 2013『東南中国における伝統のポリティクス 珠江デルタ村落社会の死者儀礼・神祇祭祀・宗族組織』風響社、全430頁。

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/2013/research28.html>（東北大学東北アジア研究センター／研究活動／進行中の共同研究）
<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/mseg/awa24/>（現代中国社会的変容に関する文化人類学研究ユニット）

6．研究組織

(1)研究代表者

瀬川 昌久（SEGAWA, Masahisa）
東北大学・東北アジア研究センター・教授
研究者番号：00187832

(2)研究分担者

川口 幸大（KAWAGUCHI, Yukihiro）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：60455235

(3)連携研究者

（ ）
研究者番号：